

冷徹な瞳をした裁判官が木槌を叩き、わたしを見下ろす。その険しい表情は一切こちらの弁明を受け付けないという強い意志が感じられて、わたしはそこでようやく、もうどうやっても逃れられないのだと諦めざるを得なかった。

「ミランダ・ヴァイスハルト。汝は神聖たる聖女の選定において不正を行った。すなわちこれは国家と教会への反逆である。この判決をもって聖女候補および貴族としての身分を剥奪する。一切の所領を返上し、王都からも即刻立ち去るように」

乾いた口を開くが、ろくな言葉が出てこなかった。仕方なく傍聴席を睨み付ければ、異世界から来たという黒髪の少女はこちらを静かに見下ろしている。後悔しても、もうどうしようもなかった。

物々しい警護のなか裁判所をあとにし、一時的に実家に戻ることが許された。わたしの顔を見るたび父母はひどく憤慨しながら苦々し気に顔をゆがめる。判

決に不服を申し立ててくれることはなく、二度と家の門をくぐるなとわたしを追いつ出した。粗末なカバンひとつを渡されて、二十余年の親子関係は清算された。

それでも何代か前に打ち捨てられた別荘に、一時的に身を寄せることを許された。いくら絶縁したとはいえ、いかがわしい商売をされれば家名に傷がつくと思つたらしい。

身の回りの世話するメイドも、当然ながら用意してはくれなかった。唯一わたしに従つたのは幼いころに道で拾つた、同じ年頃の執事だった。

二人だけでたどり着いた別荘はただ広いだけで暗くじめじめとしていて、ここで暮らさなければいけないのかと思うと涙が出そうだった。執事は立ち尽くすわたしを労わずに、窓をすべて開けて、新鮮な風を通していく。

日差しが入ると、ほんの少しだけ屋敷が明るくなった。テキパキと屋敷を掃除していく姿に、ほっとする。掃除なんて生まれてこの方したことがないから、一人でこの屋敷にきたらきつと何をすればいいかわからずに途方に暮れていたに違いない。

不遜な物言いをする男ではあるがわたしに多少の恩義を感じるだけの忠誠心はあるらしい。テキパキと一部屋まるごと一気に掃除してしまった彼は、あつという間に寝具の洗濯まで済ませてしまった。感心しながらわたしはまだ忙しくなく動いている彼に声を掛ける。

「マルティン、それが終わったら着替えさせてちょうだい。長旅で汗ばんで気持ち悪いの」

家を出るときに豪華なドレスは取り上げられ、下仕えの者と同じ服を投げ捨てるように渡された。

下々の者が身に着ける衣服とはいえ、清潔であるに越したことはない。そう当然のように言いつけられ、マルティンが顔を上げる。

サラリとした長い漆黒の前髪が揺れて、そこから理知的な琥珀色の瞳がのぞく。幼いころから飽きるほど見た顔だが、やはり平民にしては美しい。昔からずっと貴族でないのが惜しいと思っていた。

「お嬢さま、いえ、ミランダさま、なにを一人で突っ立っているんですか？」

「は？」

不躰に名前を呼んだ、執事であった男を睨み付けければ、呆れたように嘆息さ

れる。

「もう貴族ではないんです。庶民の女性は人に服を着替えさせてもらったりはしませんよ」

馬鹿にしたようにそう告げられて、顔がかあつと熱くなる。思わず手を振るかざせば、がしりと手首を掴まれた。

「あなた、いったいどういうつもりで」

「わたし、いや、オレはもうあなたの使用人ではありませんから、おとなしくぶたれてあげる義務はありません」

にっこりとそう微笑まれて、ひどく惨めな気持ちになる。目の前の不遜な男は、わたしが道で拾って、教養を叩きこんで執事まで育てあげた。かつて下町で孤児として暮らしていた彼は、物乞いとして馬車の前で見せ付けるように倒れ込んだ。下々の者にしては見目がよかったから屋敷まで連れ帰って使用人に

してやったのだ。

どこに出してもはずかしくないように教育を施してやったのに。それなのにわたし逆らうなんて。頭の芯まで湯だつように熱くて、言葉が抑えられない。

「っ、恩知らず。あなたごときがわたしに逆らっていいとも思ってるの？」

「わかっていないのはあなたの方ですよミランダ様。ここに居るのは主人と従僕じゃない。ただの男と女です」

わたしの叱責を意にも介さずに、マルティンが笑う。瞳の笑っていない笑顔に背筋がぞわりとする。掴まれたままの手首を妙に意識してしまつて、振り払おうとするけれどびくともしなかった。

「は、離さない、命令よ」

思わず裏返つてしまった自分の声がひどく情けない。マルティンはわたしを見下ろして、嘲るように唇をつり上げた。

「ミランダさま、あなたこれからどうするんです？自分の服もまともに着られない。食事だって作れない。包丁なんて、握ったことないでしょう」

「わたしにお説教するつもり？」

「事実を申し上げているだけです。頼みにしていた婚約者様も、とつくにあなたを見捨てた。あのおじいさんはあなたの若さと聖女候補の娘という評判を愛していただけだから順当な結末ではありませんがね」

罪を疑われた瞬間にためらいなくわたしを見捨てた婚約者は、親子ほど年の離れた男ではあったが、王家の縁戚で家格もあった。彼がわたしの若さを愛したように、わたしも彼の肩書を愛していた。聖女に選ばれて、侯爵夫人として権勢を誇れば、胸に巢食う虚しさがなくなるはずだったのだ。

それなのに、誰かの策略によってわたしの思い描いていた未来は簡単に崩れてしまった。大方、異世界から来た何も知らない若い娘を聖女にして神輿にし

て担ぎ上げたい誰かがわたしを陥れたに違いない。けれども、あんな策略で地位を追いやられたことよりも、家族も誰もわたしの危機に奔走してくれないということに、胸がズシリと重くなる。

「旦那様も奥様も、あなたが貴族としての地位を追われるというのに早々に受け入れた。だーれも助けてくれないじゃないですか。アナベルさまとは大違いですね」

「その名前を出さないで！」

アナベルはわたしの二つ下の妹だ。天真爛漫な性格で誰からも愛されていた彼女は、あつというまに両親の愛情を独占し、使用人達からも慕われていた。それが悔しくて妹に強く当たれば、両親に叱られる。いつも朗らかに笑うさまも、わたしから見れば脳天気で、ひどく苛立った。自分を見てほしくて必死に研鑽を積んで聖女候補になった。

両親は義務的に褒めただけで、祝いの席などは設けてくれなかった。努力が足りないから、見てもらえないのか。正式な聖女になれば、妹が産まれる前のように微笑んでくれるのではないかと思っていた矢先に、異世界から現れたという少女が現れたのだ。

自分の役目の重さも自覚せずに、のほほんと笑う顔が妹に似ている気がして酷く苛立ってしまった。最初はすれ違いざまに、忠告という名目で嫌みを吐いた。そこからだんだんとエスカレートして、顔を合わせるたびに貶めるような言葉を囁いた。

両親の愛情すら得られなかったわたしが長年時間をつぎ込んでようやく掴めそうな聖女の地位を、ぽっと出の異世界の娘に阻まれるなんて。そんなことあっていいはずがない。どうにか引きずり下ろそうと、いろいろな画策もしたが、わたしの努力は実らなかった。むしろ、それを逆手に取られてしまったのだ。

異世界から来た少女の魔力の潜在量は、わたしを遙かに凌駕していた。順当に選別を受ければ、選ばれるのがどちらかなんてわかりきっている。

聖女候補は皆一人ずつ、魔力のこもった世界樹の枝を教会から受け取る。それが本人の魔力の形に合わせて変化して、専用の杖となるのだ。そしてそれは教会で衆目があるところで授受されるため、杖をみれば誰の持ち物か一目瞭然というわけだ。

聖女を決める試験の当日、異世界の娘の杖が、なぜかわたしの部屋にあるのが発見された。わたしが異世界の娘に辛く当たる姿は、ほかの人々も知っている。人々は厳正に行われるべき聖女の選定でわたしが不正を行ったのだと疑いもしなかった。

異世界の娘のことは憎かったし、早く立ち去ってくれないかと願っていた。けれども、杖を盗んだのはわたしではない。何度弁明しても聞き入れられず、

罪に問われ、実家に泥を塗ったと罵られ、勘当されて、貴族の地位を取り上げられた。

——住む場所だけは用意してやろう。いかがわしい商売をされたらかなわん。
——これ以上迷惑をかけるのだけはやめてちょうだいね。

追い出される前に吐き捨てられた言葉に、両親が心配しているのはどこまでも自分たちの名誉と妹の幸せだけで、わたしには彼らを邪魔しないことだけを望まれているのだと思い知らされた。

きっと、わたしを愛している人はこの世に誰もいない。目の前にいる忠臣面した執事も、結局のところいままでのわたしにかけられた迷惑の憂さを晴らしたいただけなんだ。

蜘蛛の巣とほこりを払い、寢床をきれいに整えたマルティンを睨み付ける。
幼い頃から側仕えを許していたのに、生活能力がないわたしを助けるかわりに
カラダを差し出せという。

父母の関心が得られないときに、子供じみた八つ当たりをして辛く当たった。
妹の笑顔がわたしをバカにしているといつては声を荒げた。そんな積み重ねが、
彼のなかで復讐心として育っていてもなんの不思議ではない。それだけのこ
と自分はしていたのだから。

「どうせ好きでもない男に抱かれようとしていたんです。その相手がオレに
なっても同じでしょう？」

囁く声は低く冷たい。わたしは目を伏せて頷くしかなかった。

「わたしがあなたの女になれば、マルティンはそれで満足なのね」

結局誰にも愛されないのは、自分の行いが招いたことじゃないのかと頭によぎる。必死に否定しようとしたけれど、どうやっても打ち消せない。その瞬間すべてが馬鹿馬鹿しくなつて長い溜息を吐いた。

「……いいわよ」

「おや、ミランダ様にしては物わかりがよろしい。では失礼しますね」

諦めて目を閉じれば長い指がうなじをなでる。ぶるりと身を震わせる。着替えを手伝ってもらった時に何度も触れているはずのマルティンの指先の感覚をひどく意識してしまう。ゆっくりと髪をかき分けられてから、うなじにやわらかいものが押しつけられる。

「あっ」

吐息が首筋にかかつて身じろぎしようとする、抱きしめられて動きを封じられる。すっぽりと覆われて視線を上に向ければ、頭二つ分ほど上に男の顔が

見えた。

すつぱりと抱きしめられてしまえば身動きを取ることもできない。主従の関係があつたから彼はわたしを害そうとしなかっただけで、それが無い今わたしはただの無力な小娘なのだと否が応でも悟つてしまう。

「い、いやっ……」

夫にひどい扱いをされたと宮中で噂されていた貴婦人が、物陰で人目を忍んでさめざめと泣いていたのを思い出す。きっとマルティンは長年の復習を遂げるように、手ひどくわたしを抱くだろう。どんなひどい扱いをされても、わたしはそれを受け入れなければならない。血の気が引いていくわたしに気付かないのか、マルティンは笑いながら首筋を吸った。

「んっ」

「ミランダさま、動いちゃだめですよ。これからオレに抱かれるんだから、ちゃ

んとイイ子にしてくれないと。それとも、もしかして緊張してるんですか？」
体臭を嗅ぐように大きく息を吸われて、ますますカラダが固くなる。ずっと
側にいた男の、感じたことのない体温。

逃げ出したい。こわい。でも助けってくれる人なんていない。誰かに心ないこ
とを言われて泣きついたり八つ当たりするのは、きまって目の前の執事だった。
その彼にまさに襲われようとしているのだから、逃げ込む先なんてありはしな
い。

絶望して泣き喚きたい気持ちを抑えて、目の前の整った顔を睨み付ける。

「っ、へんたい。抱くなら、はやく抱けばいいじゃないっ……。あなたみたい
な下賤のものに抱かれても、獣に襲われたくらいに思っただけ」

吐き捨てれば、目の前の男の眉間に深い皺が刻まれて笑みがきえる。ひどく
傷付いたような表情に、さすがに言い過ぎたと思ったけれど、もう遅かった。

「はは、さすがミランダさま。もう貴族じゃないのに気位だけは高いままですね。ほんとうにかわいくないですね、あんた」

「……っ」

「いいんですよ。ずっと強がっていても。その強がりが続くならね」

大きな手がゆっくりと肩をなでてから下へ滑っていく。そのまま胸の膨らみの輪郭をなでられて、びくりとカラダが震えた。

「なっ」

「オレに世話をさせるためにカラダを好きにさせるんでしょう。ミランダさまが言ったんですよ？ ああ、それともこの期に及んでお嬢様って呼ばれたいんですか？ 貴族ごっこになら付き合ってあげましょうか♡」

小馬鹿にした口調で囁かれながら両側から胸を持ち上げられる。下からたぶたと軽く揺らされると、胸が軽く波打つように揺れる。

「っっっ！」

わたしのカラダを好きにできると見せつけるような行為に、唇を噛みしめる。
「おっも♡こんなの死に損ないのじじいに好きにさせるのにはもったいなかったですね♡ああ、お嬢様が貴族じゃなくなつてよかったです♡オレの手からはみでてますよ♡お嬢さまのおっぱい♡」

下品な言葉を浴びせられながら容赦なくむにゅむにゅと指を沈めさせられる。揉まれるたびにぞわぞわとして、背筋が粟立った。

「あっ、んんっ」

使用人風情に好きにされるなんて屈辱的なのに、くぐもった声が出てしまう。

「はは、かわいい声出てますね♡男の人に触られるの、はじめてですもんね♡」
「っ」

幼少期から共に過ごしたマルティンには、わたしの交友関係もすべて把握さ

れている。だから男性経験がまったくないので知っているのだ。婚約者だった老人の男は、いけすかない男だったが婚前に手を出すようなことはしなかった。「ご令嬢達が美男子に黄色い声をあげていらっしゃったときも、その輪には加わずにひたすら聖女候補に選ばれるように必死にお勉強なさっていた。舞踏会で決まり切った文句として美貌を褒めそやされたことはあれど、閨で睦言を囁かれるなんてないでしょう？」

「っ、ちょっと、あなた、なにさまのつもりっ、んん♡?!」

劣等感を煽る物言いに食ってかかろうとした瞬間、マルティンの指が胸の先端を掠める。ぞわつとした感覚が瞬く間に全身を駆け抜けて、力が抜ける。

「おや、執事風情に触れられただけでずいぶん敏感なことだ」

細長い指がくるくると胸の先端の周りをなでてから、固くなりかけている乳首に触れる。ちゃん♡と触れられただけで、腰がもどかしくゆらめく♡

「ん、そ、こっ♡」

「かわいいですね♡ミランダ様はおっぱい敏感なんだ♡誰にも触れられてなかったから気づけないままにこんなに大きくなってしまったんですね」

薄いキャミソールごしにやさしく揉みしだかれる。ぐにぐに♡とマルティンの指に従って形を変えるさまを見せ付けられて、おなかの奥が切なく疼く。身に覚えのない感覚に戸惑っていると、頭上で笑う声がした。

「おや、おっぱい揉まれておとなしくなってしまうて。さっきまでの威勢はどうしたんですか、ミランダ様？」

「うるさいっ……！ぶたれたいのっ？！」

「はは、こわいですねミランダ様の癪癪は。でもあなたの乳首、ぷくっ♡と尖ってオレを誘ってますよ」

キャミソールの生地を押しあげていることを証明するようにゆっくりと根元

から先端まで指が滑る。尖ったそれを指でつままれてきゅっ♡きゅっ♡とやさしくつぶされれば、触れられてもない場所がぬかるんでいく。

「んっ、それっ♡やめっ、やめなさいっ♡」

命令する声が心なしに甘ったるい。自分では毅然と命令したつもりだったのに、勝手に息があがっていく。

「はは♡そんなかわいい声でやめてなんていっても男を煽るだけです♡」

マルティンが糸をこよるようにやさしく乳首をねじる。左右にくりくり♡とされて、ぶるぶる♡と太ももが震える。カラダの奥から勝手に熱いものがこみ上げて、乳首からぞわぞわと全身に熱が広がる♡自分のカラダなのに、わたしの意思に反した動きをして、ままならない♡

「あ♡んあ♡そこっ♡さわられるとへんになるっ♡さわらないでっ♡さわ、るなあ♡」

「はは♡ミランダさま、かわいらしい声で変になるだなんて♡感じてらっしゃるんですね♡」

耳元で低くあまい声で囁かれて、脳がじいん♡と痺れる♡ぎゅう♡と強めに乳首をつままれて、思わず髪が振り乱れた。

「んあ♡ちがっ♡かんじてなんてなっ♡」

「おや、そうですか。そうですね♡賤しい平民のオレに触られて、青い血の流れる高貴なお身が勝手に反応するなんてこと、あつてはいけませんものね」

クスクスと小馬鹿にした笑い声を弾ませながら、乳首の先端を指先が掠める♡そのまま指が小刻みに乳頭をはじかれて、きゅん♡と誰にも触れられたことのない泉がじゅわ♡と愛液をこぼした。

「ひゅっ♡」

「こーんなかわいらしい声で喘いでいても、ミランダさまは感じてないとおっしゃる♡いや、オレの不徳のいたすところです♡貴族ごっこしたいんですよ♡ちゃんとご奉仕してさしあげなくては♡いまからこの高貴なお身体にオレのチンポぶちこんでメスにして差し上げるんだから、せめてご奉仕くらいして差し上げないとね♡」

乳首のさきっぱに狙いを定められた指が、執拗に乳首を擦る♡布擦れの音がわたしを追い詰めるように響いて、頭がおかしくなりそうだ♡

「ひんっ♡そんなことっ♡だれもたのんでなっ♡んお♡」

「はは♡乳頭ずりずり♡指で擦られるのイイんですね♡貞淑とはほど遠い下品なお声、オレのチンポにちゃんと効いてますよ♡」

ごりゅ♡とおナカに固いものを押しつけられて、ぶわと全身の血管が広がるように温度があがる♡

おかしい♡こんなの♡ずっと乳首もじんじんしてきもちいい♡おなかの奥もきゅんきゅん♡として♡これじゃあまるでわたしがマルティンに抱かれたがつているみたいじゃない♡

「おお♡」

固くしこった乳首をぎゅう♡と搾乳されるみたいに圧迫されて、下品な喘ぎ声が出ちゃう♡

「も、やらっ♡乳首っ♡コスコスするなあ♡そのっ♡下品なチンポもっ♡擦り付けるのやめなさいっ♡」

お腹に擦り付けられるその熱さに目眩がしそうになる♡勝手に腰が媚びるように揺らめいて、気持ちいいのを隠せない♡

「ミランダさまかわいい♡腰くねらせてるじゃないですか♡ご自分のカラダがいやらしいってことようやくご自覚が出てきたんですね♡」

ちがう、と反論しようとしたときに乳頭をギュウ♡とつままれる♡2本の指で上下に挟み込まれて♡そのままねじるように小刻みに乳首をいじめられる♡

「おっ♡それっ♡だめっ♡」

ブルブル♡と太ももの内側が勝手に震える♡頭の先に抜けていく気持ちいいのがカラダを弛緩させて、パチパチ♡と小さな火花が脳裏で弾けはじめた♡

「それえ♡らめっ♡ちくびっ♡ぎゅう♡ってしないでえ♡」

マルティンを罵るのも忘れて、涙ぐんでいやいやと頭を振るとおもむろに整った顔が近付いてくる。

「はは♡なっさけないミランダさま♡散々オレをこき使ってくれたのに下着越しに乳首いい子いい子されただけでこんな情けない女の子になっちゃうんですね♡こんなにかわいい声を聞かせてくれるって知ってたら、もっと早く抱いて差し上げたのに♡」

じんじんと疼く腫れ上がった乳首をおっぱいにぎゅう♡と押し込まれる♡そのままおっぱいごとぶるぶる♡と揺らされて乳首に振動が伝わった♡ぶるぶる♡震えさせられるたびに、きもちいいのがおなかの奥に溜まっていく♡パチパチ♡と弾ける火花がだんだんおおきくなって♡声が抑えられない♡

「っ♡しゅれっ♡らめっ♡あゝっ♡おっぱいきもちいい♡も、やらあ♡」

涙声で情けない声をあげるわたしにマルティンがにっこりと微笑む。

「はは♡強がって♡ミランダ様のことずーっとみてたからわかりますよ♡気持ちよくてたまらないでしょう♡だいじょうぶすぐもーっときもちよくなりますからね♡」

ぎゅむゝゝゝ♡

散々腫れぼったくなった乳首をぎゅう♡とひとよわ強く搾られて、ビクン♡とカラダは跳ねた♡瞼の裏がパチパチ♡と点滅して、爆ぜたあとにカラダの

筋肉が勝手に緊張と弛緩をくりかえす♡

「あっ♡んあっ♡？」

わけもわからずにその場に座り込もうとするカラダを支えられて整った顔がこちらをのぞき込んでくる♡

「はは♡はじめてだから自分が乳首イキしちゃったこともわからないんですか？」

整った顔が近付いてきて、頬にキスされる。何度も押しつけられる唇をぼうつとした頭で受け入れていると、顎を掬われた。そのまま近付いてくる顔を思わず押しかえせば、切れ長の琥珀色の瞳がこちらを平見つけてくる。

「まったく、乳首イキさせてあげただけじゃまだご自分の立場がわからないんですか？」

押しかえした手を壁に押しつけられて、無理やり唇を押しつけられてキスさ

れた。舌を無理やりねじこまれて、口腔を犯されていく。

「んっ、むうっ……」

熱い唾液が粘膜に染みていく。自分のものではない体液が、カラダのナカに入ってくる。まるで呼応するように唾液が滲んで、ふたりのそれが混じり合っている。

「ふっ♡うう♡」

半ば無理やり犯されているのに、一度イカされたことでマルチンにたいする警戒をカラダが解いてしまったのか、かんたんに熱が高まっていく。

「あ♡やめ♡やめなさいっ♡いや♡ん♡ん♡ん♡」

口づけの角度を変えるために解放されるわずかな時間で、いやと頭をふっても声はすっかり期待してしまっている♡もっと気持ち良くなりたいとカラダが正直になってしまう。

マルティンの骨ばった手が太ももを撫でさすれば、腰が揺らめく。そのまま
ショーツのテラテラとした生地をなでられて、太ももをすり合わせてしまう。

「やめなさい、じゃなくてもっと触って欲しいの間違いでしょう？ミランダさ
ま？」

喉奥で意地悪く笑った男は内股をゆっくりとなで上げてからクロッチ部分に
指を這わせた。大切な場所を守る布地に触れられて、ぐちゅり♡と粘っこい音
が響く。

「こんなに濡らして♡いやらしいですねミランダさまは。執事風情と罵ったわ
りには、オレに犯されたいみたいですよ♡」

ぬちぬち♡とわざと愛液が染みこんだ布を秘裂へ押し込まれて、びくん♡とカ
ラダが震える♡

「ほらミランダさま、見えますか？ここにはまだまともに触れて差し上げてな

いの、糸引いてるじゃないですか♡こんな淫乱でも聖女候補が務まったんですね♡」

「~~~~っ♡ふざけないでっ♡きやうっ♡」

あんまりな物言いに声を荒げようとした瞬間、マルティンがクロッチ部分をねっとりと撫で上げた。

「ミランダ様のおマンコ♡肉土手ぷっくりして膨らんでるじゃないですか♡それにかわいらしいクリトリスもちょん♡ってかわいく存在感を主張してますよ♡」

秘裂の上にある肉豆をすりすりとなでられて、思わず足が外へ開く♡踏ん張らないと、立ってられない♡

「にゃあ♡そこっ♡さわるなっ♡」

敏感な肉豆をすりすり♡と骨ばった指が何度もなでる。そこを触られるたび

に足に変な力が入ってしまう♡

「ふっ♡うづ♡うづ♡」

「は♡ミランダ様ったら下品なガニ股でとても淑女の姿とは思えませんね♡
ここそんなに敏感なんですか？誰にも触られたことなかったのに。聖女なんか
より夜な夜な夫を喜ばせる淫乱な妻のほうが向いてますよ♡」

肉豆の亀頭を布越しに押さえられてビリビリ♡とあまい電流が全身に広がっ
ていく♡そこを触られるだけで、反論する気力が削がれていく♡

「お♡そこっ♡ああゝゝっ♡」

ぐちゅぐちゅ♡とわざとらしく水音を響かせながら、クリトリスを指で押さえ
付けられる♡じんじんと疼く熱が、理性を蝕む♡

「は♡かわいい声ですね♡もうショーツもびしょびしょじゃないですか♡」
張り付いたショーツを掴んで上に持ち上げられると、布地にクリトリスが圧迫

される♡クリトリスを圧迫された状態で布を左右に動かされて、ずりずり♡と肉豆を擦られいく♡

「にゃ♡あぁ♡こんなっ♡げひんなっ♡あぁ♡あいぶでっ♡かんじてなんてえ♡」

ショーツを食い込まされて容赦なく下着でクリを磨かれて♡こんな屈辱的なことされて感じてるなんて♡

「はは♡おマンコにショーツ食い込まされてきもちいいですね♡いつもの勢いがすっかりなくなってるじゃないですか♡そんなにショーツでクリ磨きされるの気に入りましたか？あぁ、でもこっちもかわいがって差し上げないとね」

「んお♡」

嘲るようにわらいながらむにゅり♡とおっぱいに指を沈められる♡赤く腫れた乳首の表面を軽く爪でカリカリとされて、濁った声がでる♡

「いますぐぶちこみたいの我慢してミランダさまのことをかわいがってあげて
るんです♡男を誘惑するやらしい声でせいぜいチンポ媚びしてくださいね♡氣
位だけ高くて所領も貴族の地位もないただのミランダさま♡」

「っっっ♡かってなことっ、いって♡」

「強がれるうちに散々強がってください♡どうせすぐに陥落してオレのチンポ
銜え込んで、あれだけ辛く当たっていたオレに媚びて生きるしかミランダ様に
残された道はないんですから♡」

「それはっ、むかしからわたしのことを」

「ええ、あなたがオレで憂さを晴らしているときも早く組み敷いて抱いてやり
たいと思ってましたよ。泣きそうな顔してオレをぶってるあなたを見てずーっ
とこうしてやりたいって思ってたんですよ♡」

「ひうっ」

ぐいとショーツをさらに強く食い込まされて、きもちよさとみじめさがないまぜになる。結局、この男もわたしの癩癰を慰めるふりをして、わたしのことを嫌いだったんだ。金切り声で使用人に喚いて、やつ当たりしてるんだから、最初から好かれるはずもない。

衣食住を与え、下町の言葉を矯正し、生きる術を与えてやったとしても、それを笠にきていたのはわたしだ。だからいつかこの生意気な女を屈辱的に組み敷いてやりたいと憎しみを募らせていったに違いなかった。

「っ、マルティン……」

「どうしましたか？」

うなじの汗をべろりと舐めとられる。応えるようにぶろりと震えるカラダが恨めしい。

「あなたのいうとおりよ、わたしにはもうあなたしかいない。あなたに頼って

生きていくすか術がない」

弱音を吐けば、マルティンが琥珀色の双眸をわずかに見開いてから低い声で笑う。

「ミランダさま、ようやく気付いたんですか？そうですよ、あなたはオレに頼って生きていくしかないんです」

満足そうに頬をなでるマルティンの顔はこころなしか恍惚として愉しそうだった。いままで散々自分を虐げていた女主人を組み敷けると嬉々としているのだろう。

「……だから、気の済むようにしてちょうだい。別に、前戯なんてしてくれなくていいわ。そのいきり立ったものをわたしに突き刺せばいいじゃない」

窮屈そうにズボンの下で膨張しているそれに視線を向ける。誰も知らない蜜壺に、招き入れるにはおそらく長大なそれを考えると、思わずカラダが強ばる。

「ミランダ様？」

「わたしが、憎いんでしょう？当然よね、わたしの使用人だったばかりにあな
たまで屋敷を追い出されたんだもの。せっかく死に物狂いで孤児から執事がで
きるまで教養を身につけたのに、ぜんぶわたしが台無しにしたのよ」

自分で告げながら、わたしがどれだけ彼にとっておぞましいことをしたのか
把握する。ようやく人並み以上の生活を得たのに、わたしの日頃の行いが悪い
せいでくだらない罪をきせられて、その基盤をまるごと破壊してしまった。

「いまさら、許されるとは思えないけどあなたの気がそれで済むのなら」
そこまで告げたところで、頭上から苛立ちを隠せない声が振ってくる。

「……あんた、なんか勘違いしてないか」

とつくに矯正したはずの粗野な口調でなじられて、おそろおそろマルティン
の顔を見る。

「そうよね、わたしのカラダなんか好きにしたって気持ちなんて晴れないでしょうけど。もうわたしにはこれしか差し出せるものがなっ、んっ♡んん♡」

顎を乱暴に掬われて、貪るように口付けされる。舌を無理やりねじこまれて呼吸もできない。カラダを縮こまらせていると、口腔の粘膜に舌を這いずり回る。酸素が足りなくて、脳みそがくらくらする。よろめけば、ぎゅうと抱きしめられた。まだわたしがあまり荒れていなかった子どものころ、よくハグしてもらって慰めていたのを思い出す。

長い口付けからようやく解放されたころには銀色の糸が伝っていた。

「あんた、本当に気が付かなかったんですか？オレの気持ちに」

「え」

「あんたのわがままにオレが付き合ってたのは別に、恩義を感じてただけじゃない。尊大なのに繊細なあんたが、かわいそうでかわいくて側に仕えてきたん

ですよ」

「は、え」

「ああ、あんたにはこっちの言い方のほうが馴染み深いですか？お慕いしておりますよ、ミランダさま」

散々わたしを弄んでいた男がほころぶような笑みを浮かべる。その顔を見ただけなのに、ぶわっと顔が熱くなるのを感じた。